〈青森県史〉の窓 45

工業都市八戸の拠点 〝三角地帯〟

宮本利行
（県史編さん調査研究員・県立八戸南高校教諭）

八戸市は、昭和期に入ってから本格化する東北振興策と、戦時下における軍需工場の誘致で、工業都市として発展の基礎を築いていく。

まず、東北振興の成果として最初に誘致された工場は、大正10年（1921）に操業を開始する日の出セメント工場である。開業披露式には、この日のために作られた「日の出踊り」が小中野の芸者により披露されている。それほどセメント工場は、八戸の住民にとって喜びと期待が大きかったのだ。この工場は大正14年（1925）に磐城セメントとなり、現在は八戸セメントとして90年近く操業を続けている。

三角地帯
（昭和34年9月26日・県史編さんグループ所蔵）

次に誘致された工場は、昭和12年（1937）、八戸市に創立された日東化学工業会社である（写真の中央右端に見える工場）。この工場は、戦後、政財界の重鎮となる大日本製糖会社社長の藤山愛一郎が積極的に進めた事業であった。当初、アルミニウムの原料となるアルミナの製造が主たる目的だったが、技術的問題を解決できず、販売するほどの生産に至らなかった。そこでアルミナ製造の過程において産出されるリン酸とアンモニアから、硫安などの肥料を製造する工場となった。敗戦による国家的疲弊を克服するための食糧増産政策は、肥料の需要増となり、日東は生産の拡大とともに企業規模を拡大していった。昭和32年（1957）には従業員が1、500人に達し、八戸に進出した工場では群を抜く大工場となり、八戸の経済・雇用に大きく貢献した。

昭和14年（1939）には日本砂鉄工業会社が進出してくる（写真の中央左端に見える工場）。これまで困難とされていた砂鉄の製錬に大阪工業試験場が成功したため、この会社は砂鉄製錬の工業化を目的に兵庫県高砂町に設立された。八戸への進出は原料となる砂鉄が太平洋岸に豊富に埋蔵されていたことからであった。

八戸の臨海工業地帯となる通称「三角地帯」は、あばれ川として流域住民に水害をもたらしていた馬淵川の改修工事（昭和12年開始）の結果としてできた土地である。工事は堤防建設による治水工事を目的としていたが、馬淵川河口付近右岸に日東化学工業や日本砂鉄工業などの工場が進出してくると、八戸市長の神田重雄が、この地域を臨海工業地帯とする構想を打ち出す（この事業は「神田構想」と称されている）。

この構想は、馬淵川河口から約3キロの沼館集落付近から捷水路を太平洋へ向けて開削し、切り替えられた旧河川に水門締め切り工事を行うとともに浚渫し、工業港とすることであった（写真左上の河川が開削されたもので、中央が工業港となった旧河川）。こうして馬淵川切替工事による捷水路の開削と、旧河川の浚渫によって生じた土砂を利用して、馬淵川河口の三角州にできた埋立地が「三角地帯」である（写真上部の土地が三角形になっているのがお分かりになるだろうか）。

昭和30年代になると、この三角地帯には東北電力八戸火力発電所（写真の三角地帯右寄りに見える2本の煙突が立っている建物）と、日曹製鋼会社（写真の三角地帯左寄りの工場）が進出してくる。こうして三角地帯は工業都市八戸の拠点となっていくのである。